

理学博士 牧野富太郎 創始 主幹 薬学博士 朝比奈泰彦

# 植物研究雑誌

## THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 29 卷 第 4 號 (通卷 第 315 號) 昭和 29 年 4 月發行

Vol. 29 No. 4 April 1954

### 山崎 敬\*: 東亞産ママコナ属

Takashi YAMAZAKI: *Melampyrum* of Eastern Asia.

東亞産ママコナ属は、昭和 16 年の津山博士、北村博士の研究によつて明らかにされたが、なおかなり喰違いがあるので、その後の調査による私の見解も加えて検討してみる。

ママコナ属を分類する特徴として、従来から萼片の形が重視され、しばしばこれによつて種類が区別され、又節の特徴としても重要視されている。ママコナ属は花冠の形が殆んど同じで、特徴があまり現われないので、標本の上で区別しようとすると、最も変化の多い、萼片の形に注目され勝であるが、種類の特徴として萼片の形が全くたよりにならないことは、第 1 図に示された各地のミヤママコナ、シコクママコナの萼をみても明らかである。ただ地域的にはいくらか一定の傾向があることが認められる。九州・中国のものは萼片は卵形であり、四国・近畿では細長い形であり、裏日本では短い 3 角形であり、表日本のものは上部 2 片が特に大きく円頭となる傾向がある。然し傾向が認められるだけで、はつき

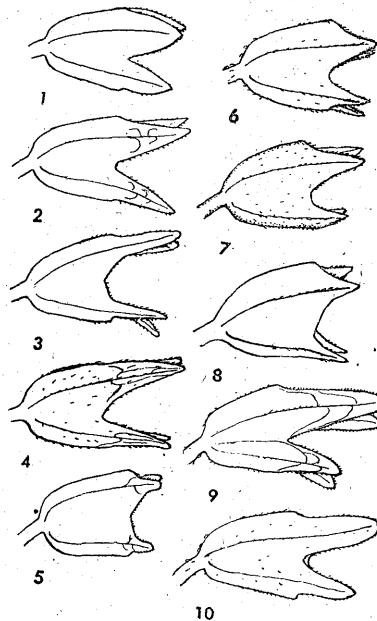


Fig. 1. *M. laxum* のガク。1—5. シコクママコナ 6—9. ミヤママコナ。1) 大隅, 高隈山。2) 日向, 祖母山。3) 土佐, 横倉山。4) 美濃, 多治見。5) 三河, 鳳来寺山。6) 信濃, 鈎伏山。7) 岩代, 飯豊山。8) 渡島, 匠館。9) 駿河, 御殿場。10) 武藏, 武甲山。(すべて ×8)。

\* 東京大学理学部植物学教室 Botanical Institute, Faculty of Science, University of Tokyo, Tokyo.

りしたものではない。又似たような事がツシマママコナでもみられる。大体ツシマママコナの方がミヤマママコナやシコクママコナより鋸く尖つているが、中には区別しかねるものもある。このように萼片の形が当にならないとすると、どこに特徴があるかが問題となる。

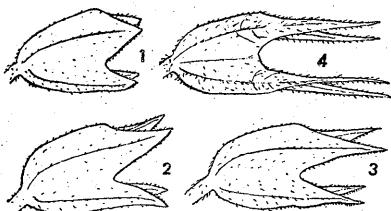


Fig. 2. *M. roseum* (ツシマママコナ) のがく。  
1) 满州, 黄河省, 長山峰。2) 朝鮮, 黄海道, 首陽山。3) 满州, 關東州, 過水寺。4) 朝鮮, 全羅南道, 大黒島。 (すべて  $\times 8$ ).

ソバマママコナ (*M. setaceum* Nakai), ヒカゲママコナ (*M. Nakaiianum* Tuyama), ゲンザンママコナ (*M. Kawasakianum* Kitamura) の10種類である。ヒカゲママコナとゲンザンママコナとが朝鮮に限られるのを除けばすべて日本にある。

これらの種類を花の色からみると2つの群が認められる。ひとつはミヤマママコナ、シコクママコナ、タカネママコナ、ヤクシマママコナの群であり、下唇の陸走部は他と同じ白色であるが、花喉の両脇は黄橙色である。花は黄色の色素をもち、普通紅紫色の色素でかくされていて、花喉部にのみ顯著に現われているが、所謂白花となると、紅紫色の色素のみがなくなり、黄色の色素が目につくようになり、花喉部の黄斑が目立つのみならず、上唇が薄い黄色となる。したがつて普通シロバナと呼ばれるところをウスキミヤマママコナとかキバナママコナとか呼ばれている。ママコナ、ツシマママコナ、ホソバママコナでは花喉両脇は白色であり、黄色の色素は全くない。マルバママコナ、ヒカゲママコナ、ゲンザンママコナでは確めてないが、他の形態から推して前記種と同じと思う。ミヤマママコナ、シコクママコナ、タカネママコナ、ヤクシマママコナでは萼片は反巻する傾向が強く、苞葉の先端は一般に鈍頭であるが、他の種類では萼片は直立で先端は尖り、苞葉の先端も尖っている(第3図)。以上のように東亞のママコナ属には2つの系統が認められる。この2つの群はそれぞれはつきりしていて、中間形はみられない。ミヤマママコナとタカネママコナとは、前者が本州中部から北海道南部まで広く分布しているのに対し、後者は八ヶ岳、甲斐駒岳、鳳凰山、秩父雁坂峠にのみ知られるごく分布範囲の狭いものである。タカネママコナはミヤマママコナからは、全体柔弱で小さく、葉は細長くて赤味がかり、花は常に淡黄白色で小さい点で異つている。八ヶ岳にはミヤマママコナ、ツシマママコナ、タカネママコナがあり、ミヤマママコナは山麓(祖原)の標高 1100 m 位の大きな松林の下草としてみられ、ツシマママコナは少し上部で 1300 ~ 1700 m のシラカバやカラマツの林の縁にみられる。タカネママコナは佐久側の標高

2100m位の針葉樹林帯にあり、岩崩れの跡の日当りのよい灌木の中にみられる。各種類はそれぞれ生育場所を異にし、混生することはない。ここに生ずるミヤマママコナは生育状態で形が異なり、日陰に生ずるものは生育が旺盛で、葉は広く、緑色が濃く、花も大きく普通の形であるが、林の縁の日当りのよい、乾燥した場所に生ずるものは、全体小さく、葉は細長く赤味がかり、花もわりと小さくなつて、花が赤紫色である点を除けばタカネママコナそっくりである。タカネママコナの形態も生育状態と関連するものと思われる。東北地方

のブナ帶上部の日当りのよい乾いた場所にも、しばしばそういう形がみられ、タカネママコナとして報告されることもあるが、花は紅紫色で大きく、ミヤマママコナである。

北村博士が秩父両神山からタカネママコナとして報告しているものも、やはり同様な状態のミヤマママコナと思われる。秩父の山にはミヤマママコナの白花品が多い。タカネママコナの花は小さい以外に、色も形もシロバナミヤマママコナと全く同じであることからも、両者は同一種とすべきであろう。

本州中部以西・四国・九州には津山博士が独立種としたシコクママコナがあり、これは北村博士のウバママコナである。花の色からも苞の形からもミヤマママコナに近縁のものである。ミヤマママコナからは、苞の基部に鋸歯をもつてゐるので異なるだけで、他の性質は殆んど同じである。中部地方では両者が交錯している。 *M. laxum* Miquel がシコクママコナとミヤマママコナとの、どちらにあたるか問題である。Miquel 氏の記載からはいずれともわからない。シコクママコナが区別された際

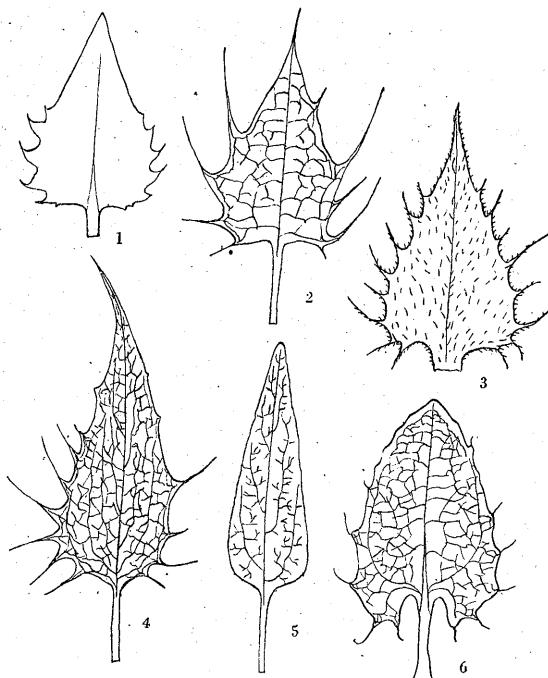


Fig. 3. 種々の苞。1, 2) ツシマママコナ (*M. roseum roseum*)。  
3) ママコナ (*M. roseum japonicum*)。4) ホソバママコナ (*M. setaceum setaceum*)。5) ミヤマママコナ (*M. laxum nikkoense*)。  
6) シコクママコナ (*M. laxum laxum*)。

*M. laxum* はミヤマママコナに使われたが、その理由は説明されていない。北村博士はシコクママコナを認めず、したがつて苞の形にはあまりふれておられないが、夢の形について「小泉教授が Miquel 氏の原品をみられた御意見では、本邦南部丘陵に生ずる型である」と書かれている。Miquel 氏が引用した標本は Owari (Keiske) と Uriwuno Matsi insulae Kiusiu (Pierot) である。尾張は大部分平地なので、ミヤマママコナ類がありそうな所は美濃・三河の国境・猿投山一帯の山地と思われるが、この近くの多治見にはミヤマママコナもシコクママコナも存在する。Uriwuno はどこか確定できない。宮崎市の近くに爪生野村という所があるが、平地らしいのでミヤマママコナ類はありそうもない。九州のこの類は五島を除いて、総てシコクママコナなので Uriwuno の標本もシコクママコナとみて間違ないと思う。尾張・三河のものも殆んどがシコクママコナなので、九州のものを基準として *M. laxum* はシコクママコナにあてるのが正しいと思う。

ミヤマママコナの類には、いくつかの品種や変種が報告されている。その中で特に注目されるのはミヤジマママコナ (f. edentatum) である。安芸・周防・長門・肥前五島もシコクママコナの分布範囲に入るのに、苞に鋸歯がなくミヤマママコナに酷似している。ただ茎は枝分れが多く、苞や葉は細くなる傾向があるが、ミヤマママコナとの区別は困難である。本州の東と西に飛び離れて似た形が現われているのは興味がある。コウヤママコナ (var. *platyphyllum*) は特別な群とは考えら

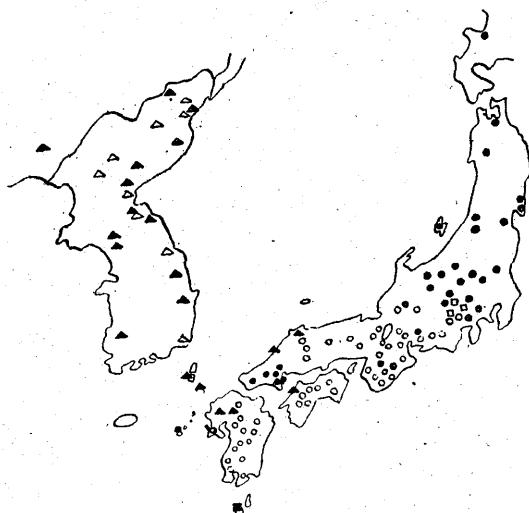


Fig. 4. *M. setaceum*

- ▲ var. *setaceum* ホソバママコナ.
- △ var. *Nakaiianum* ヒカゲママコナ.
- M. laxum*
- var. *laxum* シコクママコナ.
- var. *nikkoense* ミヤマママコナ.
- var. *arcuatum* タカネママコナ.
- var. *yakusimense* ヤクシママコナ

れない。イセママコナ (var. *longitubum*) は花筒が長いことで区別されたが、そう顯著なものではない、又萼片が細長く尖つているが、それはシコクママコナでもみられる所である。九州の祖母山からアツバママコナ (var. *crassifolium*) が報告されている、

祖母山ではこの類は 1200~1600 m の所にみられる。下部のミズナラやブナの下に生えているものは葉が薄く、普通のシコクママコナであり、上部の草原にあるものは葉が厚くなつていて、ツバママコナの形である。単に生育状態の異なることによる違いとみるべきであろう。

ヤクシママコナもミヤママコナの系統である。全体が小さく、花も小さい点タカネママコナに似るが、葉や苞が普通広楕円形で、花が紅紫色である点異なる、然し時に葉の細いものもあるのであまり顯著な違いがあるとはいえない。大和の大台原にもヤクシママコナがあると報告されているが、大台原のは花が大きくミヤママコナである。

ツシママコナの類はミヤママコナの類が日本に限られているのと異り、中支・北支・満州・朝鮮・日本と分布が広く、変化に富んでいて、多くの種類にわけられている。



Fig. 5. *M. roseum*

- var. *roseum* ツシママコナ.
- var. *ovalifolium* マルバママコナ.
- ▲ var. *japonicum* ママコナ.

これらの種類はそれぞれはつきり独立した種類でなく、分布も形態も連續していて、種を大きくみれば一つの種類ともみなしうるが、ツシマママコナとホソバママコナとの2つの群が認められる。前者にはマルバママコナ・ママコナが、後者にはヒカゲママコナ・ゲンザンママコナが属す。

ツシマママコナでは花序は伸長し、苞は稍長い柄を持ち、卵形で小数の鋸歯がある。萼は無毛が僅かの毛を散生し、萼片は伸長しないものが多い。マルバママコナでは花序は短く、花を密生し、苞の柄は短く多数の糸状に伸びた鋸歯をもつ、萼は無毛か僅かの毛を有し、萼片は銳尖頭となる。ママコナはマルバママコナに似ているが、花軸や萼に長い毛を密生することで区別される。ツシマママコナは中支・北支・満州・朝鮮から日本では九州中部、北部・中国地方の高原の叢の中や林の縁に生じ、中部地方では白馬山、燕岳・戸隠山・八岳・鳳凰山などの山麓高原にみられる。マルバママコナは朝鮮東南部の山地に分布し、日本では壱岐、対馬にある。ママコナは朝鮮南部・九州・四国・本州・北海道南部に分布し、クリ帯上部の日当りのよい叢や林の縁に生ずる。このように朝鮮から日本列島にくるにつれ、ツシマママコナからマルバママコナ、ママコナへと変つていて、中部地方にあるツシマママコナには、同じ場所で萼に毛のないものから、かなり毛の生えているものまで色々あり、苞の鋸歯もかなり長くなり、ママコナとの区別が困難である。朝鮮南部にはマルバママコナかツシマママコナか区別に困難な個体もあり、花冠の形も色も全く同じであるので、同一種類とするのが適当であろう。

ホソバママコナの群は、葉が線状披針形か線状長楕円形で、先の方へ次第に細長くなっている。顯著な特徴は苞の色である、花序の下の方の苞は鋸歯だけがえび茶色であるが、上のものになるにつれ苞柄が紅紫色になり、花序の半ば以上のものでは主脈の周囲から苞柄にかけて緑色を失い、白味がかった紅紫色になつて、花序の上部にある萼も背面は暗赤紫色で下面は白っぽい紅紫色である。最近北川博士は対馬でホソバママコナの苞葉が緑色であることをみてこられたが、この場合でも花序の上部の苞は、基部から柄にかけて白っぽい紅紫色のようである。苞の下半部が緑色を失つて白くなることは、ママコナ類の生育の良い個体には時々みられることであり、又日当りのよい場所では葉や苞が紅紫色になることはしばしばみられることで、ホソバママコナの苞の色もそろ特殊な性質とは思われない。花冠の形も色もツシマママコナと全く同じであることからしても、ツシマママコナの群と著しく異なるものではない。然しこの群の苞が紅紫色になるのは、生育地の状態にあまり関係なく現われることと、葉の形に特徴があるので明らかに区別できる。ゲンザンママコナは萼片の形によつて区別されたものであるが、それがあまり重要視されない性質のものであるから、特定の群とは認め難い。ヒカゲママコナは花序が短くて花が密生し、葉は大きくて広く、苞は卵形で多数の長い鋸歯をもつ点でホソバママコナから区別されるが、その違いは丁度ツシマママコナとマルバママコナとの関係に似ている。チョウセンママコナ(var. *latifolium*)を中間として、連續的に

変化している一つの種類とみなすべきものと考える。ホソバママコナの北限として大和が報告されているが、その標本は大和の何処かはつきりせず確実でない。現在知られている確かな北限ないし東限は、出雲簸川郡東村、伊予伊予郡青島である。ハクトウママコナ (var. *alpinum*) はツシマママコナの変種として書かれたものであるが、葉が細長いのに苞に多くの長い芒状の鋸歯のあることから、ホソバママコナの葉の広い形と思う。上に扱つた以外になお多くの変種や品種が報告されている。此等のうち花の形、葉の形、毛の有無で区別されたものは、その性質があまり固定した特徴を示さないので、けつきりした群と認めがたい。萼の形で区別されたものは、前記した如く萼片の変化に僅かながら地域性があることから、いくらか群としてのまとまりが認められるが、やはりはつきりしたものではない。此等を整理すると次のように分類される。

Clavis specierum et varietatum.

- 1) Flores in fauce laterale luteo-maculati. Bracteae apice obtusae ..... *M. laxum* (2).  
Flores in fauce laterale albo-maculati. Bracteae apice acutae vel acuminatae ..... (5).
- 2) Planta majora. Folia majora superiora abrupte (rarius sensim) in bracteas abeuntia. Corolla 13-18 mm longa ..... (3).  
Planta minora. Folia minora superiora sensim in bracteas abeuntia. Corolla 10-11 mm longa ..... (4)
- 3) Bracteae integrae et non hastatae ..... *M. laxum* var. *nikkoense*.  
Bracteae saepe hastatae margine inferiore pauci- vel pluridentatae ..... *M. laxum* var. *laxum*.
- 4) Flores purpurei. Bracteae ovatae vel oblongae ..... *M. laxum* var. *yakusimense*.  
Flores luteo-albi. Bracteae lanceolatae vel lineari-lanceolatae ..... *M. laxum* var. *arcuatum*.
- 5) Bracteae virides. Folia oblongo-lanceolata vel ovata apice breviter acuta vel acuminata ..... *M. roseum* (6).  
Bracteae roseo-purpureae. Folia lineari-lanceolata vel lanceolata attenuato-acuminata ..... *M. setaceum* (8).
- 6) Inflorescentia vulgo elongata. Bracteae vulgo longe stipitatae apice acuminatae margine inferiore dentibus acuminatis utrinque 1-5 jugis praeditae. Calyx glaber vel sparse hirsutus ..... *M. roseum* var. *roseum*.  
Inflorescentia vulgo conferta Bracteae vulgo breviter stipitatae apice

atteunato-acuminatae vel setaceae margine utrinque dentibus longissime filiforme acuminatis pluro-jugis praeditae ..... (7).

7) *Calyx glaber* vel *pubescens* rarius *villosus* ..... *M. roseum* var. *ovalifolium*.  
*Calyx* dense ciliatus ..... *M. roseum* var. *japonicum*.

8) *Folia lineari-lanceolata* 15-80 mm longa 2-13 mm lata. *Bracteae lanceolatae* ..... *M. setaceum* var. *setaceum*.  
*Folia lanceolata* vel late lanceolata 40-120 mm longa 10-35 mm lata.  
*Bracteae ovatae* ..... *M. setaceum* var. *Nakaianum*.

**Melampyrum laxum** Miquel in Ann. Mus. Bot. Lugd. Bat. 2: 122-123 (1865).

var. *laxum*.—*M. australe* Nakai ex Tuyama (79. 1941).—*M. roseum* var. *brevidens* Kitamura (7. 1941).—*Sikoku-mamakona*.

Distr. *Honsyu*: Kai, Tōtōmi, Mikawa, Mino, Hida, Etizen, Tazima, Ōmi, Izumi, Yamasiro, Kawati, Ise, Kii, Yamato, Izumo, Settu, Bittyū, Bingo, Nagato. *Sikoku*: Iyo, Awa, Tosa. *Kyusyu*: Buzen, Bungo, Tikugo, Hizen, Higo, Satuma, Ōsumi.

var. *laxum* forma *leucanthum* Yamazaki, forma nov.—*Sirobana sikoku-mamakona*. Flores pallidissime sulphurei fere albi in fauce laterale luteo-maculati.—*Honsyu*: Omi, Mt. Hirasan.

var. *nikkoense* Beauverd (514. 1916).—*M. australe* forma *edentatum* Tuyama (79. 1941).—*Miyama-mamakona*.

Distr. *Hokkaido*: Osima. *Honsyu*: Mutu, Ugo, Uzen, Rikuzen, Iwasiro, Etigo, Sado, Ettyū, Etizen, Simotuke, Kōzuke, Musasi, Suruga, Kai, Sinano, Mino, Ise, Kii, Yamato, Aki, Siō, Nagato. *Kyusyu*: Ins. Gotō.

var. *nikkoense* forma *albiflorum* Hara—*M. laxum* forma *albiflorum* Hara in Jour. Jap. Bot. 10: 366 (1936).—*M. laxum* forma *lutescens* Tuyama (79. 1941).—*Sirobana-miyama-mamakona*.

var. *arcuatum* (Nakai) Soō (142. 1927).—*M. arcuatum* Nakai (6. 1909).—*Takane-mamakona*.

Distr. *Honsyu*: Prov. Kai, Mt. Komagatake et Mt. Hōōzan 1800-2000 m alt; Prov. Sinano, Mt. Yatugatake 2100 m alt; Prov. Musasi, Titibu, Karisaka-tōge, Kuroiwa.

var. *yakusimense* (Tuyama) Kitamura (9. 1941).—*M. yakusimense* Tuyama (77. 1941).—*Yakusima-mamakona*.

Distr. *Kyusyu*: Ins. Yakushima 1800 m. alt.

**Melampyrum roseum** Maximowicz, Prim. Fl. Amur. 210 (1859).

var. **roseum**.—*M. Henryanum* Soô (143. 1927)—*Tusima-mamakona*.

Distr. *China*: Honan, Hupeh, Shantung, Chekiang, Kiangsi, Kiangsu, *Manshuria*: Jehol, Liaoning, Chilin, Helungkjan. *Korea*: Kanhoku, Kannan, Heinan, Kôkai, Kôgen, Keiki, Tyûnan, Keihoku, Keinan, Zennan. *Kyusyu*: Ins. Tusima, Hyûga, Higo, Tikujo, Tikuzen, Bungo, Buzen. *Honsyu*: Nagato, Suô, Izumo, Aki, Bingo, Harima, Inaba, Tanba, Kawati, Yamato, Ise, Mino, Etizen, Hida, Noto, Sinano, Kai.

var. **ovalifolium** Nakai ex Beauverd (548. 1916).—*M. ovalifolium* Nakai (7. 1909).—*Maruba-mamakona*.

Distr. *Korea*: Kanhoku, Kannan, Kôgen, Keihoku, Zenhoku, Keinan, Zennan, Ins. Saisyûtô. *Kyusyu*: Ins. Iki, Ins. Tusima.

var. **ovalifolium** forma **albiflorum** (Beauverd) Nakai (108. 1917).—*Sirobana-maruba-mamakona*.

var. **japonicum** Franchet et Savatier, Enum. Pl. Jap. 2: 460 (1879).—*M. ciliare* Miquel, 1. c. 122 (1865).—*Mamakona*.

Distr. *Korea*: Kôgen, Keinan, Keihoku. Ins. Saisyûtô. *Kyusyu*: Ins. Iki, Tikuzen, Bungo. *Sikoku*: Tosa, Iyo. *Honsyu*: Suô, Mimasaka, Settu, Yama-to, Kii, Yamasiro, Tanba, Tazima, Iga, Mino, Etizen, Kaga, Noto, Sinano, Kai, Musai, Awa, Kôzuke, Simotuke, Iwasiro, Iwaki, Rikuzen, Uzen, Ugo. *Hokkaidô*: Osima.

var. **japonicum** forma **leucanthum** Nakai (8. 1909).—*Sirobana-mamakona*.

**Melampyrum setaceum** Nakai (9. 1909).

var. **setaceum**.—*M. setaceum* var. *latifolium* Nakai (31. 1917).—*M. roseum* var. *alpinum* Kitamura (6. 1941).—*M. Kawasakianum* Kitamura (14. 1941).—*Hosoba-mamakona*.

Distr. *Manshuria*: Liaoning. *Korea*: Kanhoku, Kannan, Kôgen, Keiki, Keihoku, Zenhoku. *Kyusyu*: Ins. Iki, Ins. Tusima, Tikuzen. *Honsyu*: Suô, Iwami, Izumo. *Sikoku*: Iyo.

var. **Nakaianum** (Tuyama) Yamazaki, stat. nov.—*M. Nakaianum* Tuyama (85. 1941).—*Hikage-mamakona*.

Distr. *Korea*: Kanhoku, Heinan, Kogen, Keinan.

### Litterae

Beauverd G., Monog. Gen. *Melampyrum* in Mém. Soc. Phys. et Host. Nat. Genéve. 38: 29-657 (1916); Kitamura S., *Melampyrum Japonica* in Acta

Phyt. Geobot. 10: 1-14 (1941, Mai); Nakai T., Revisio *Melampyri* Asiae orientalis in Bot. Mag. Tokyo, 23: 5-10 et (45)-(46) (1909); et *Melampyrum* Koreanum I. c. 31: 106-109 (1917); Soo R., *Melampyrum* species of East Asia. in Journ. Bot. 65: 138-145 (1927); Tuyama T., On Genus *Melampyrum* of Japan in Journ. Jap. Bot. 17: 77-95 (1941 Feb.).

○タチネコノメサウ 奥武藏にあり (水島正美) Masami MIZUSHIMA: *Chrysosplenium tosaense* found isolated in the vicinity of Tokyo.

武州入間郡東吾野村, 梅園村の近辺は今年倉田悟氏によつて多くの暖地性羊齒類を産することが分つて來た。1953年4月19日, 上記二ヶ村内を歩いた折に梅園村の溪流岩上にタチネコノメサウを採集した。其の場所は奇しくも倉田氏がアヲネカヅラを発見された崖の直下に当つて居る。名称は原博士に確認して戴いた。初めツルネコノメサウと思つたが, 地上匍枝がなく帶紅色 1 cm 長未満の地中匍枝があるので妙に思つた。然しタチネコノメサウと分つて見ると牧野先生がツルネコノメサウの変種に下されたことがあるのも宜なる哉と首肯される。

本種は現在迄に伊勢, 美濃, 山城以西の本州, 四国, 九州の山中陰地又は溪側に生ずるとの報告があるが, 以東に発見の報を知らない。然し杉本順一氏の御教示により遠江秋葉山(杉本 1930 年), 八高山(杉本 1932 年), 小笠郡土方村(黒沢美房), 駿河龍爪山(伊東博 1953 年)の4ヶ所の産地を知り得た。依て東海道にも本種を産する事を此所に報告する。採集した溪流の周辺は大体植林されたスギの林で, コナラやシデ類も多いが, 往古は鈴木時夫氏の謂われるカシ型に近い森林が発達していたであろうと想像する。武州の森林植生は挙げて河田博士の“常緑落葉針広混交林”に属することになるが, 奥武藏は奥多摩よりも錯雜した谷を有して冬の卓越風の影響を緩和し, 今日二次林に普通な樹種を含むこと多しと雖も林中にスダジヒやカシ類も亦多いことから推して“常緑針広混交林”により近い形の森林が見られたであろうと考える。若し復元された林相が斯様なものであるとせば, 過去の気候の反映としてのアヲネカヅラ, セイタカシケンダ, イハヘゴ等々の産と共にタチネコノメサウの存在も十分可能なものと言えよう。尙倉田氏によれば奥武藏にはオホメシダを産するが, 此の寒地性羊齒は暖地性種とは別途に, より新しく秩父方面から分布して來たものかとも考えられようが, 或は地史に結びついた更に古い遺存分子かもしれない。兎も角オホメシダを産すると云う事実は奥武藏の古植物相を上述の如きものの持続であつたろうと簡単に割切るのに一抹の不安を投げるものとなる。

終りに標本の同定を賜うた原博士及び懇書を惠まれた杉本順一氏に深謝を捧げます。

(東京大学理学部植物学教室)

○ソヨゴの産地 (久内清孝) K. HISUCHI: A locality of *Ilex pedunculosa* Miq.

ソヨゴ (*Ilex pedunculosa* Miq.) は, 本州西部では普通のものだが, 関東へ来ると一般的でなくなる。昭和 28 年 5 月 5 日, 埼玉県の棒の折山の川又からの登山道の右側で一本見出した切株から出たひこばえだが一応記録しておく。この附近にはヲノヲレ, アヅマシロカネソウが見られた。